

盂 蘭 盆 御 書

弘安二年七月一三日 五八歳

盂蘭盆うらぼんと申し候事は、仏の御弟子の中に、目連尊者もくれんと申して舍利弗しゃりほつにならびて智慧第一・神通第一と申して、須弥山しゅみせんに日月のならび、大王に左右の臣のごとくに御座をはせし人なり。此の人の父をば吉懺師子きっせんししと申し、母をば青提女しょうだいによと申す。其の母の慳貪けんどんの科とがによて餓鬼道に墮ちて候ひしを、目連尊者のすくい給ふより事をこりて候。

其の因縁は母は餓鬼道に墮ちてなげき候ひけれども、目連は凡夫なれば知ることなし。幼少にして外道の家に入り、四井陀しいだ・十八大経と申す外道の一切経をならいつくせども、いまだ其の母の生処をしらず。其の後十三のとし、舍利弗とともに釈迦仏にまいりて御弟子となり、見惑けんなくをだんじて初果の聖人となり、修惑しゅわくを断じて阿羅漢あらかんとなりて、三明をそなへ六通得をへ給へり。天眼をひらいて三千大千世界を明鏡のかげのごとく御らむありしかば、大地見透をみとをし三悪道を見る事、氷の下に候魚を朝日にむかいて我等透がとをしみるがごとし。其の中に餓鬼道と申すところに我が母あり。のむ事なし、食らふことなし。皮は金鳥きんでうをむしれるがごとく、骨はまるき石をならべたるがごとし。頭はまりのごとく、頸くびはいとのごとし。腹は大海のごとし。口をはり手を合はせて物を乞こへる形は、うへたるひるの人のか香をかけるがごとし。先生せんじょうの子をみてなかとするすがた、うへたるかたち、たとへをとるに及ばず。いかんがかなしかりけん。法勝寺の修行舜観執俊真がいわうの島にながされて、はだかにて、かみくびつきにうちをい、やせをとるへて海辺へんにやすらいて、もくづ藻屑をとりてこしにまき、魚を一つみつけて右の手にとり、口にかみける時、本もとつかいしわらわのたづねゆきて見し時と、目連尊者が母を見しと、いづれか疎をろかなるべき。かれはいますこしかなしさをまさりけん。

目連尊者はあまりのかなしさに大神通現をげんじ給い、はん飯をまいらせたりしかば、母よろこびて右の手にははんをにぎり、左の手にてはんをかくして口押にし入れ給ひしかば、いかんがしたりけん、はん変じて火となり、やがて燃もへあがり、とうし灯心びをあつめて火をつけたるがごとくばと燃もへあがり、母の身のごごと焼ことやけ候ひしを目連見給ひて、あまりあわてさわぎ、大神通を現じて大いなる水をかけ候ひしかば、其の水たきゞとなりていよいよ母の身のやけ候ひし事こそあわれには候ひしか。

其の時、目連みづからの神通かなわざりしかば、はしりかへり、須臾しゅゆに仏にまいりて、なげき申せしやうは、我が身は外道の家に生まれて候ひしが、仏の御弟子になりて阿羅漢の身しょうをへて三界の生しょうをはなれ、三明六通の羅漢とはなりて候へども、乳母ははの大苦を

すくはんとし候にかへりて大苦にあわせて候は心うしとなげき候ひしかば、仏説ひて云はく、汝が母はつみふかし。汝一人が力及ぶべからず。又多人なりとも天神・地神・邪魔・外道・道士・四天王・帝釈・梵王の力も及ぶべからず。七月十五日に十方の聖僧をあつめて、百味を^飲を^食じきを^とのへて、母の^苦くは^救すくうべしと云云。目連、仏の仰せのごとく行なひしかば、其の母は餓鬼道一劫の苦を脱れ給ひきと、盂蘭盆経と申す経にとかれて候。其れによて滅後末代の人々は七月十五日に此の法を行なひ候なり。此は常のごとし。

日蓮案じて云はく、目連尊者と申せし人は十界の中に声聞道の人、二百五十戒をかたく持つ事石のごとし。三千の威儀を備へて^欠かけざる事は十五夜の月のごとし。智慧は日に^似たり。神通は須弥山を十四さうまき、大山をうごかせし人ぞかし。かゝる聖人だにも重報の^は乳母の^は恩ほうじがたし。あまさへ^刺ほうぜんとせしかば大苦をまし給ひき。いまの僧等の二百五十戒は名計りにて、事を^戒かいによせて人をたばらかし、一分の神通もなし。大石の天にのぼらんとせんがごとし。智慧は牛に^類るいし、羊にことならず。設ひ千万人をあつめたりとも父母の一苦すくうべしや。

せんずるところは目連尊者が^は乳母の^は苦をすくわざりし事は、小乗の法を信じて二百五十戒と申す持齋にてありしゆへぞかし。されば浄名経と申す経には浄名居士と申す男、目連房をせめて云はく「汝を^尊供養する者は三悪道に墮つ」云云。文の心は、二百五十戒の^たうとき目連尊者を^だくやうせん人は三悪道に墮つべしと云云。此又唯目連一人が^聞きくみ^耳にはあらず、一切の声聞乃至末代の持齋等がきくみなり。此の浄名経と申すは法華経の御ためには数十番の末の郎従にて候。詮ずるところは目連尊者が自身のいまだ仏にならざるゆへぞかし。自身仏にならずしては父母をだにも^況すくいがたし。いわうや他人をや。

しかるに目連尊者と申す人は法華経と申す経にて「正直捨方便」とて、小乗の二百五十戒立ちどころになげすて、南無妙法蓮華経と申せしかば、やがて仏になりて名号をば^た多^ま摩^ら羅^ば跋^つ梅^{せん}檀^{だん}香^{こう}仏と申す。此の時こそ父母も仏になり給へ。故に法華経に云はく「我が願ひ既に満じて衆の望みも亦足りなん」云云。目連が色心は父母の遺体なり。目連が色心、仏になりしかば父母の身も又仏になりぬ。

例せば日本国八十一代の安徳天皇と申せし王の御宇に平氏の大将^あ安^き芸^{のかみ}守清盛と申せし人をはしき。度々の合戦に国敵をほろぼして上太^か政^み大臣^{だいじょう}まで臣位をきわめ、^{とう}当^{ぎん}今^{しん}はまごとなり、一門は^{うん}雲^{かく}客^げ月^{つげい}卿につらなり、日本六十六国島二つを掌の内にかいにぎりて候ひしが、人を^{したが}順^{たが}ふる事大風の草木をなびかしたるやうにて候ひしほどに、心を^橋ごり身

あがり、結句は神仏を^悔あなづりて神人と諸僧を手ににぎらむとせしほどに、山僧と七寺との諸僧のかたきとなりて、結句は去ぬる^{ししゅう}治承四年十二月二十二日に、七寺の内の東大寺・興福寺の両寺を焼きはらいてありしかば、其の大重罪入道の身にかゝりて、かへるとし^{ようわ}養和元年^{うるう}潤二月四日、身は^炭すみのごとく血は火のごとく、^炭すみのをこれるがやうにて、結句は^{ほのお}炎身より出でて^熱あつちじに^死死に^{むねもり}き。其の大重罪をば二男宗盛にゆづりしかば、西海に沈むとみへしかども東天に浮かび出でて、右大将頼朝の御前に縄をつけてひきすへて候ひき。三男知盛は海に入りて魚の糞となりぬ。四男重衡は其の身に縄をつけて^{鎌倉}京かまくらを引きかへし、結句なら^{奈良}七大寺にわたされて、十万人の大衆等、我等が仏のかたきなりとて^{ひとたち}一刀づつききざみぬ。悪の中の大悪は我が身に其の苦をうるのみならず、子と孫と末七代までもかゝり候ひけるなり。善の中の大善も又々かくのごとし。

目連尊者が法華経を信じまいらせし大善は、我が身仏になるのみならず、父母仏になり給ふ。上七代下七代、上無量生下無量生の父母等^{そんがい}存外に仏となり給ふ。乃至代々の子息・夫妻・所従・檀那・無量の衆生三悪道をはなるゝのみならず、皆初住・妙覚の仏となりぬ。故に法華経の第三に云はく「願はくは此の功德を以て^{あまね}普く一切に及ぼし、我等と衆生と皆共に仏道を成ぜん」云云。

されば此等をもって思ふに、貴女は治部殿と申す孫を僧にてもち給へり。此の僧は無戒なり無智なり。二百五十戒一戒も持つことなし。三千の威儀一つも持たず。智慧は牛馬に^類るいし、威儀は^{えんこう}猿猴^仰にて候へども、あをぐところは釈迦仏、信ずる法は法華経なり。例せば蛇の^{たま}珠をにぎり、竜の舍利を戴けるがごとし。

藤は松にかゝりて^{ちひろ}千尋をよぢ、鶴は羽を^{たも}持ちて万里をかける。此は自身の力にはあらず。治部房も又かくのごとし。我が身は藤のごとくなれども、法華経の松にかゝりて妙覚の山にものぼりなん。一乗の羽をたのみて寂光の空をもかけりぬべし。此の羽をもて父母・祖父・祖母・乃至七代の末までもとぶらうべき僧なり。あわれいみじき御たからはもたせ給ひてをはします女人かな。彼の竜女は珠をさゝげて仏となり給ふ。此の女人は孫を法華経の行者となしてみちびかれさせ給ふべし。

事々そうそうにて候へばくはしくは申さず、又々申すべく候。恐々謹言。

七月十三日

日 蓮 花 押

治部殿うばごぜん御返事

^{しらげごめ}麩^焼牙一俵・^米やいごめ・うり・なすび等、仏前にさゝげて申し上げ候ひ了んぬ。